



手をつなぐとも

等友

S
60
・10
・1生

〒111-0041
台東区元浅草
2-10-17
3841-2844
真宗大谷派
勝龍山
等覚寺
住職
朝倉創

平成27年5月
第101号
責任編集
朝倉 翔

境内のつつじ

ありがとう

わたしには
くるしみも
かなしみも
しつばいも
くろうも
いやなことも
みんな 必要でした
それで わたしになりました
—— ありがとう ありがとう

人は一生の間にいろいろなことにであいます。
いやなことにもいっばい。もうであいたくないと
思うのですが——。

住職から一言

早いもので4月28日で、住職継職してから一周年を迎えました。

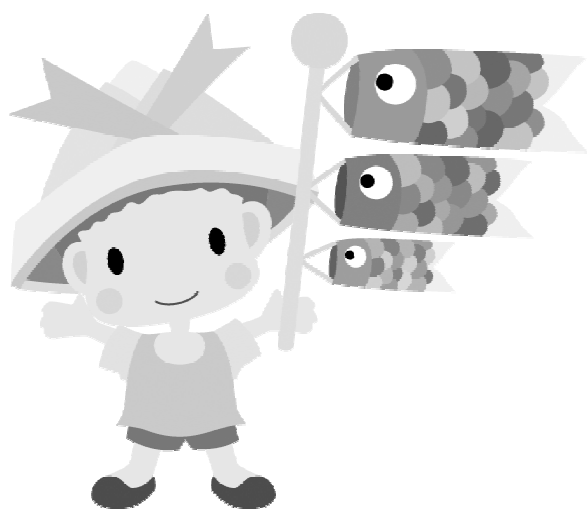
お寺同士の会議でも「住職」として出席するようになり、責任が重くなったことを実感することの多い毎日です。

さて、以前ご案内しました「正信偈を読ん
で書いて学ぶ会」がスタート致しました。

毎月第二日曜日の午後2時からを基本として開催する講座です。合同法要や法事で慣れ親しんでいる正信偈について、みなさんと一緒に学んでいきたいという願いから始まりました。初めて開催する連続講座ということで、どなたも申し込みがなかったらどうしようと弟と心配しておりましたが、総勢13名で行うことが出来て嬉しく思っ

おります。途中参加もしやすい会ですので、是非お気軽にご参加ください。
親鸞聖人の感動の詩である正信偈と一緒に味わいましょう！

釋創龍



行事報告

○新年会法要

平成二十七年一月十八日、新たな年を迎え暖かな日に新年会のご法要をお勤めいたしました。お勤め後にはみなさんで楽しい会食・くじ引きで大いに盛り上がりました。一年の行事の中でも一番楽しい行事だと思いますので初めての方も次回はいかがでしょうか。ここでは住職のご法話と行事の様子をご紹介します。

新年会法話

1. ご利益（ごりやく）

浄土真宗を開かれた親鸞聖人は一般的に言われる現世利益（げんせいりやく）、現世でのご利益というものは、決して本当の意味での私たちのご利益ではないんだということを教えてください。

おみくじで大吉を引ければ今年はいいいことがあるかもということとその場を過ごすんでしょうけど、凶が出ちゃうとそれが気になってお祓いでもという心になってしまいうわけですね。だったら引かなければいいのに思いうんですけどね。それでも引かずにはおれないというか、そういう私たちのあり方があるわけです。親鸞聖人のご和讃の一つにこういう和讃があるんです。

悲しきかなや道俗の良時吉日（りょうじきちじつ）、
天神地祇（てんじんちぎ）をあがめつつ、ト占祭祀（ぼくせんさいし）をつとめとす

要は僧侶も一般の方々も、いい吉日を選んでいたり、神さままたはそういったものを崇めつつ、占いやまつりごと、そういうことに一生懸命つとめている、と。こういう姿を見て、それを親鸞聖人は悲しきかなや、という言葉でおさえられていると思います。

日本人は昔から占いやおみくじをするのがむしろ一般的なほうですから、こういうことが

迷信だと分かってはいながらそれに頼りながら今を生きてるわけですね。その裏返しには、そういうことに頼らないとどこか落ち着かないような私たちの日頃の姿があるということ。を親鸞聖人が教えてくださっていると思うんです。そういうものに頼らなければ落ち着きを求めることができない。イコール私たちは今の生活に不安を常に抱えながら生きている



んではないかということですね。そういうことをこのご和讃からも教えてくださってるよ
うな気がするんです。特にこのト占祭祀、要
は占いですけれども、占いとかっていうのは
開運なんかって言いますね、開運、運を開く
と。占いによって人生を開いていきましょう
と。そういうことを占い師さんとかはうたっ
ております。ですが、本当にそうなのかとい



うことですね、占いが悪ければそのことに苛まされて何か常に気になってしまつて、少しでも悪いことがあるとあの占い当たつてるかしろとかそういうことになってしまふ。要は決して道を開くものではなくて実はそういうものによつて縛られてしまふ私たちがいるんじゃないかと思うんですね。そういう私たちの本当のあり方というのを親鸞聖人はこの和讃で教えてくださっているんじゃないかなと思うんです。親鸞聖人は『歎異抄』^{たんにしやう}という書物の中で、「念仏は無碍^{むげ}の一道なり」と、こ
うおっしゃつてゐるんです。

南無阿弥陀仏という念仏は感謝の言葉です。よくご説明してる通り阿弥陀さんはもうすでに私たちを救おうとされています。私たちは決して何かへすがつたりするのではなくて、阿弥陀さんが、自分の力ではどうこうすることもできない私たちを救つてくださつてゐるんだから、ただただ感謝の言葉として念仏を申

すだけでよいと。このことを念仏というのですが、この念仏は一切さわりのない一つの道である。これはこの道しかないということではないと思うんですね。人生はいろんな道があるんですね。その中から親鸞聖人は阿弥陀さんの救いのもとへ行こうという一つの道を選ばれている。その道はさわりが一切ないのだと。親鸞聖人ご自身、浄土の教えによつて、こういう境地になられたわけですね。

ですから今年は何を申したいかという、年始の挨拶として、改めて日頃の私たちのあり方を顧みて、そして親鸞聖人のおっしゃるこの無碍の一道というものをぜひ皆様と一緒に一生かけて歩んでいきたいなと思います。仏教の教えというのは、本当の自分が見えてくる教えですから、何かを頭で理解するということではなくて、自分のあり方というものが仏さまの光に照らされることによつて見え

てくる。そして歩んで行く道が見えていく。それが本当の仏教のご利益であります。ですから、今年一年ケガがないとか病気がないとかそういうことを願ってしまう私たちのあり方がどうしてもありますけれども、それを、お守りを買ったから安心とかそうではなくて、病に倒れてもけがに倒れても、そういうことも私の命の一部なんだと、そうやって受け止めて歩んで生きる。そういう私たちの本当の意味での力強さというか、迷信に惑わされない強い生き方というのを皆様と一緒に改めてしていきたいと願ひまして、ご挨拶とさせていただきます。（法話釋創龍）

○春彼岸・永代経法要

平成二十七年四月二十七日にお彼岸・永代経法要をお勤めいたしました。この日も多くの方と一緒にご先祖さまへいただいているのちを感謝するお勤めをさせていただくことができました。永代経法要は会食ではなくお弁当をお持ち帰りいただく形式ですので、会食が苦手な方もお参りしやすいかもしれません。住職からのご法話は、みなさんの家にあるお内仏（お仏壇）のお話しをさせていただき、日々の疑問にこたえるような身近なお話となりました。



厄年？厄除け？厄払い？

よく年末年始が近づきますと連日のように厄除けは〇〇へお参りを、とテレビCMで放送されています。私たち日本人にとっては厄年・厄除けというのは一般的に定着しています。ただ、今まで等覚寺へお参りされた時に厄除けをやっていたこと、見たことありますか？そうなんです、私たち浄土真宗では厄除けはしないんです。ご存知の方も多いかと思いますが、今回はあらためて簡単にお話しさせていただきます。

そもそも厄年ってなんなんでしょう。厄除けをされている神社・寺院に行くとき必ず男女の厄年の年齢が張り出されています。その年齢のあたりに災厄が多いと昔から言い伝えられていました。では厄年の由来はどこから来ているのでしょうか。はっきりとした根拠はないようですが、中国の陰陽道から来ている

ようです。陰陽道は天文や暦・占いの知識を合わせて吉凶を占う方術ですが、それによると数え年で男性は四十二歳、女性は三十三歳が大厄とされています。四二（死に）三三（散々）ということので私たちになんらかの災いが起きやすいと言われているようです。これが厄年です。そしてこの厄が自分に降りかからないように願って行うのが厄除けなんだそうです。

厄年には病氣や不幸など、何かしら良くないことがあると言われますが、病氣や不幸は厄年にだけおこるものでしょうか。厄年でない年は病氣や不幸が全くないと言いきれるのでしょうか。それでも厄年には病氣や不幸があると言われてしまうのは、厄年に病氣や不幸がおこると「厄年だから」という理由の後付けができるからではないかと思えます。厄年でなくとも「厄年に近いから」「家族に厄年がいるから」と理由の後付けはいくらでも

できてしまいます。つまり厄年だから病気や不幸が訪れるという考えの裏側には自分の病気や不幸を何かのせいにしたいという私たち人間の欲があるのです。

では実際に私たちの仏教の教えでは厄についてどう考えられているでしょうか。仏教を開かれたお釈迦様は、人は必ずこの世に「生」まれ「老い」ていき、「病」に倒れ、そして

「死」をおかえるものであるとおっしゃいました。どう避けようとしても避けられない老病死の人生をどう生きていくのか、これが仏教の教えの始まりです。つまり生きている限り苦しみは必ずあるものだ、という考え方なのです。苦しいことはなるべく遠ざけ、良いことを招きたいというのは私たちの願望（欲）ですが、そうはならないのが私たちの姿なのです。親鸞聖人の師である浄土宗を開かれた法然上人も、祈ることによって、病気が治ったり命が延びるのであれば、誰一人として病気になったり死んだり

ないでしよう、とおっしゃっています。

仏教徒として生きる以上、仏教の教えにない迷信（厄年、占い、風水、姓名判断、六曜など）を気にする必要はありません。つまり、「除災招福」をしないのが私たち仏教徒です。浄土真宗はかたくなにこれを守ってきました。ですから等覚寺でも厄除けはいたしません。いただいた一年を「厄年」という言葉に縛られてビクビクと生きるより、予期せぬ出来事が起きたら起きたでそれをご縁として生きていく、そんなすべてが尊い一日一日をお念仏申し上げながら過ごしていきたいものです。

◎先代住職法語集のご案内

十七世住職 朝倉馨の法語を集めた簡単な本を作りました。

法語とは門前の掲示板に掲示していたものです。先代住職を偲ぶ会にいらした方から大変ご好評をいただいたため、ご希望される方にもお作りすることになりました。一冊千円の実費のご負担でお作りいたしますのでよろしければどうぞ。

ご連絡いただいてから製作いたしますので、必ずご希望する日よりも前にご連絡ください。

ご披露

等友へのご懇志

鳴海恵三様 浅井京子様 加藤伊知郎様

保田ふみ様 万代ゆきこ様 福原次郎様

高橋健治様 小笠原時子 (順不同)

いつもご支援いただきまして、誠にありがとうございます。また、他にも多数の方から等友へのご支援をいただいております。(申し訳ございませんが、お名前には漏れがあるかと存じます。おっしゃっていたければ次号以降に順次ご紹介させていただきます) きたいと思っています)

備忘録　　法事の準備

○まずはお寺へ日程連絡

回忌の確認をし、ご家族で法要希望日をお決めになりお早目にお寺へご連絡ください

○当日必要なもの

・お布施

・お花代（本堂にお飾りする

お花代で、一万円の実費）

○ご希望によってお持ちください

・お供物

・過去帳やお位牌

・遺影（小さいもの）

○服装は平服でも結構です。

（ご参加される方同士でお話しされてお決めください）

※お寺へお包みいただく表書きは全て「布施」と書いていただければ結構です。浄土真宗の場合は「読経料」「霊前」という言葉は用いません。

備忘録　　お焼香作法

○お焼香のタイミング

お勤め中に声が掛かりますので、それまでお待ちください。順番には決まりはないので、施主の方から前に出てご焼香ください

○お焼香作法

・焼香机の前に進み合掌せずにご本尊を仰ぎ見ます。香盒（香入れ）の蓋を開けて香盒の右に置きます。

・右手でお香を二回、香炉にくべます。（お香を額に頂くことはしません）お香の乱れを指先で直してから「南無阿弥陀仏」を称えて合掌礼拝をします。

・自分の後にお焼香する方がいれば蓋はそのままだにし、最後であれば蓋を閉めて自席に戻ります。

編集後記



こんにちは、釋翔雲（弟・翔）です。今年の春は天気が安定しませんね。上野公園の桜も満開直後の雨や風であつという間に散つてしまい、お花見のタイミングを逃してしまいました。花より団子なはずなのに悔しいのは不思議ですね。やっぱり物事は後回しにしてはならないことをあらためて気付かされた気がします。

さて、今回は厄年について記事にしてみました。僕も神社等に行くと必ず厄年のポスターが貼られていて不安な気分させられますよね。厄除けを否定するわけではないのですが、何かにすがらずにはおれない私たちの姿というのをあらためて感じてもらいたいなと思ったのです。厄除けやおまじないってきりが無いと思いませんか？一度お願いして悪いことが起きなければ、次はお願いせずにはいられなくなっちゃいますよね。逆に悪いこ

とが起きればお願いが足らなかったのかと、次はもっとお願いごとをしてしまう……。おまじないが悪いものとは言いません、占いも結果に一喜一憂するのは楽しいことです。ですが、そこにすぎるのではなく、私たちの本来の姿をきちんと理解した上で楽しく付き合っていくことが大切なのではないでしょうか。ここだけの話ですが、僕も受験の時は湯島天神にお参りましたしね（笑）

さて、四月からお寺で正信偈講座が始まりました。正信偈を書き写すことができる本山の教材を使って、正信偈を実際に書きながら、勤め方や意味も一緒に勉強しています。一見すると難しそうですがまったくそんなことはなく、雰囲気も気楽ですのでぜひ参加してみてください！

平成二十七年行事予定

五月十日(日)	
六月十四日十五日	等友旅行会
六月二十一日(日)	正信偈講座
六月十九日(金)	真宗門徒のつどい (於・真宗会館)
七月十三日～十六日	お盆
七月十八日(土)	盂蘭盆会法要
八月九日(日)	正信偈講座
九月十三日(日)	正信偈講座
九月二十日～二十六日	秋季彼岸
十月三日(土)	いのちのふれあい ゼミナール
十月二十五日(日)	報恩講
十一月八日(日)	正信偈講座

◎みなさまお誘い合わせの上、
お気軽にご参加ください。

平成二十七年年回表

一周忌	平成二十六年
三回忌	平成二十五年
七回忌	平成二十一年
十三回忌	平成十五年
十七回忌	平成十一年
二十三回忌	平成五年
二十七回忌	平成元年
三十三回忌	昭和五十八年
三十七回忌	昭和五十四年
四十三回忌	昭和四十八年
四十七回忌	昭和四十四年
五十回忌	昭和四十一年
七十回忌	昭和二十一年
百回忌	大正五年